

京都東山山麓における社寺の立地特性に関する研究

現代システム科学域・環境システム学類・環境共生科学課程

水内 洋樹（下村ゼミ）

1.研究目的 京都東山は、平安時代より都の人々からの信仰の対象となっており、その山麓には多数の社寺が建ち並んでいる。一般的に山麓は、水が集積しやすい扇状地地形であり、庭園の池泉などに多くの水を必要とする社寺の立地に適した場所である。本研究では、東山の山麓の中から左京区の浄土寺、鹿ヶ谷、錦林地域に位置する社寺を対象として、各境内地における地形、水脈、景観を解析することにより、社寺の立地特性を解明した。

2.研究方法 本研究では、GIS（地理情報システム）、現地写真、近代以前に発行された各種絵図を用いて解析を行った。調査対象とする社寺は、慈照寺から南禅寺まで南北に連続して分布する9つとした（図1）。まず、社寺の周辺地域の自然的・地理的特性については、国土数値情報などが公開する地理データをもとに標高、流域、土地利用、植生、用途地域、風致地区、景観地区について整理し、対象地域の現況から捉えた。次いで、同地域の歴史的特性については、絵図や文献を読み解き、各社寺の成立時期や周辺地域の土地利用の変遷から捉えた。さらに、対象社寺の中から、現地調査を実施した2019年11月4日に拝観可能であった慈照寺、法然院、安楽寺、若王子神社、禅林寺の5社寺を抽出し、社寺別に解析した。解析項目は地形、水利、景観の3つで、それぞれ基盤地図情報の10mメッシュDEM（数値標高モデル）をもとに、境内地における傾斜、累積流量、可視領域を算出し、現地で撮影した写真や絵図と比較しながら社寺の立地特性を捉えた。

3.解析結果および考察 【歴史的背景】東山の山麓は古代より火葬場や陵墓として利用されており、都の葬送地として存在していた。また、御所から約3kmの距離に位置することから公家や歌人の離宮、山荘などが多く立地した。これらを由来として南禅寺や慈照寺といった大寺院や、浄土宗系の念仏道場などが創建される。近世においても、五山の送り火が行われるなど宗教的な場所の利用が継続され、現在のような帯状の社寺分布が成立した。明治時代には、疏水の開通により工業地化が計画されるが、発電計画の変更や風致保全の機運が高まったことで京都市近郊の住宅地に変容した。その中には、疏水の水を利用した別荘群や、東山山麓の静謐な環境を好んだ文人たちの邸宅が

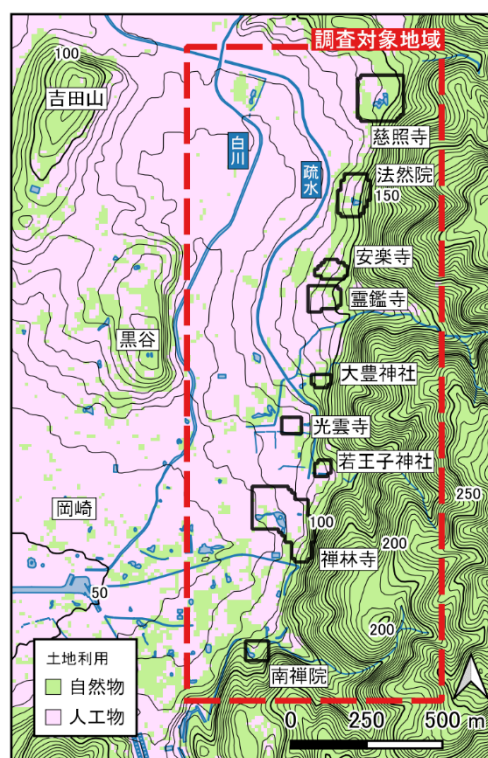


図1 対象地域の寺社分布

多数建築され、閑静な住宅街が形成された。戦後には、市街地整備や景観保全に関する制度が整えられ、現在では良好な町並み景観が維持されている。

【立地特性】地形解析からは、扇状地特有の起伏の変化を生かして、東山への接近感を演出していることが判明した。各社寺は平坦な境内と急峻な山林を有しており、慈照寺、法然院、禅林寺では境内地における最大斜度が 30° を超えていた。また、慈照寺と禅林寺においては、東山の山域を周遊することができ、地形の高低差を生かして境内や市街地を見渡す眺望性を有している。水利解析からは、 1m^2 当たりの累積流量値が高いほど豊富な水環境にあることが判明した。 1.95 メッシュ/ m^2 と最も高い値を示した若王子神社では、境内地の前に自然河川が流れており、境内から 100m ほど上流には高さ約 3m の滝が存在した。次いで高い値の 1.34 メッシュ/ m^2 を示した慈

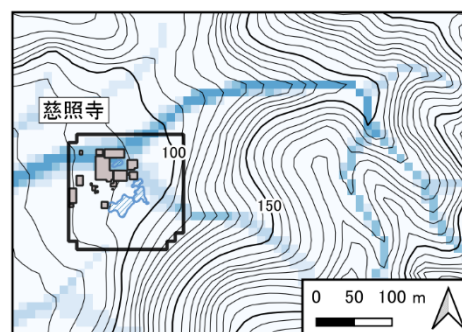


図 2 水脈図（慈照寺）

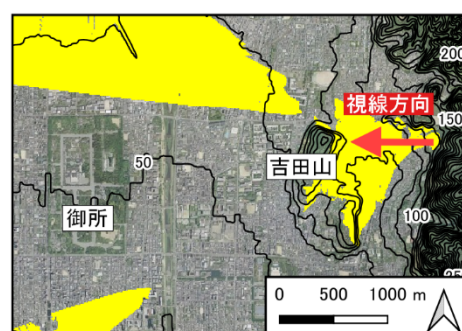


図 3 市街地方向の可視領域（慈照寺）

照寺は、二つの水脈が合流する地形となっており、広大な池泉回遊式庭園を有している（図 2）。一方で、 0.12 メッシュ/ m^2 と最も低い値を示した安楽寺では池泉が存在せず、枯池によって水空間を表現しているに過ぎなかった。また、 0.54 メッシュ/ m^2 の禅林寺では、西側を流れる疏水分線から水を引き込むことで池泉や滝の水量を維持している。景観解析からは、全ての社寺で東山の山並みを背景に取り込んでいることが判明した。また、地形的には市街地方向への眺望が可能であるものの、ほとんどの社寺でその眺望を遮るように高木が繁茂しており、俗世界から隔離された神聖な空間となっていた。例外的に眺望が可能であった社寺は、慈照寺と禅林寺である。慈照寺については、約 1km 西側に位置する吉田山によって御所への視界が遮られており、政治との関わりを断絶しようとした創建者 8 代将軍足利義政の意思が伺える（図 3）。禅林寺に関しても、眺望地点である多宝塔が建立したのは昭和初期であり、近代以前にその眺望性はなかったと考えられる。各種の名所図会にも全ての社寺で東山の山並みが背景に描かれており、東山が重要な景観要素であることが判明した。

4.まとめ 東山の山麓には、多くの社寺が集中しており、平安時代より貴族階級が別業や隠遁地として利用してきた静謐な場所の性質が継承されてきた。これらの社寺は、山域に差しかかる起伏のある地形と、山林を含む緑豊かな境内を有している。また、扇状地特有の豊富な水環境や、疏水からの引水を利用して池泉回遊式の庭園が形成されている。さらに、市街地方向の眺望を閉ざして東山方向に視線を向けさせることで、東山の懷に抱かれた独自の世界が培われている。今後、東山の風景と豊かな水環境を維持していくためには、すでに行われている周辺市街地の物的規制だけではなく、東山そのものの植生や生物多様性の保全といった生態学的なアプローチも必要であると考えられる。